

横須賀の地から

多様な生き方が生まれることを願って

NPO法人『アンガージュマン・よこすか』

不登校やひきこもりの子どもや青年、その家族たちを支援するNPO法人「アンガージュマン・よこすか」が、今年四月に上町に開設されました。代表の小柳良さんと事務局の吉本照子さんにお話を伺いました。

◆アンガージュマン・よこすかの活動

学校に行けない子どもたちを学外で指導する適応指導教室(現ゆうゆう)の父母たちが、自助グループ活動を七年余りするなかで、親だけではなく子どもや若者が安心して集い話し合える場所がほしいと願い、その想いを実現させたのが「アンガージュマン・よこすか」です。フリースペースの提供、学習サポート、相談、自助グループ活動支援など、活動は百家族の会員(七月現在)によつて支えられ、不登校やひきこもりの子どもや若者たちがここを基点に社会に出ていく応援をしています。

◆迷い、悩み、自分を責める親たち

子どもが不登校やひきこもりになると、育て方が悪かったのではないか、父親や母親がこうだから、夫婦の関係が悪いからなどと、親はまずは自分を責めてしまします。子どもが何故こうなったのか理解できず、この現実にどう対応したらよいのかと迷い悩みながらも、直接的に「子どもにか

かわる」とが多い母親は、「どうとかと言えば子ども現状を受け入れたいと努めます。しかし、自分が社会の一員としてやってきている父親は、自分と同じように社会とかかわらないわが子をそのまま受け入れることができず、妻を攻撃するような言葉をふつける」ともあるそうです。

◆父親だけの自助グループ「ダッド」

子育てに問題がおきると、母親だけに子育てをまかせる父親のことが取り沙汰されます。しかし父親が子育てに参画しない以前に、ひたすら働くことを本文としでてきた男性たちが社会の規範に裏付けられた社会的言葉しか持ちえていないことの方が問題だとアンガージュマンは考ります。ひとりの人間としての父親の想いが伝わるような言葉を発することができないのです。ともすれば

父親は論理的技術的に問題解決しようとしたがちなのです。父親も孤独であり行き迷っているはずとつづじで、父親だけの自助グループ「ダッド」を立ち上げました。以前から父母の集まりには割くらいの父親の参加がありました。社会的価値観で生きているからこそ男性の辛さや頭だけを考えるきつさなどを気楽に話せる場にしようとした七人の父親が集まりました。家族の中での自分のあり方や、子どもとのかかわり方などを話すことから、自分の生き方が見えるようになれたらい

◆多様な生き方を認め合おう

生産社会から消費社会に移行している現在、新たな価値観(倫理観)が必要であるにもかかわらず、依然として「ひとりは社会性の欠如、みんなと一緒に」との生産労働に基づく価値観で子どもたちを囲い込もうとする」との無理。体育祭や合唱

コンクールをきっかけに不登校が始まることが多い現実がそれを証明しているのかもしれません。不登校やひきこもりは家庭の中で解決できる事象とするのではなく、社会問題としての視点を持つことで新たな考え方を獲得できるはずです。一人ひとりの生きしていくリズムの違いを認め、多様な生き方が理解できる社会にしていかなくては真の問題解決に向つてはいけないとのことでした。

多様な生き方ができる社会とは、まさに男女共同参画社会。自分らしい生き方が選択でき、それを認め合う社会なのです。「アンガージュマン・よこすか」発の多様な生き方が生まれますよう、活動にエールを送りたいと思います。

NPO法人
アンガージュマン・よこすか
横須賀市上町二ノ四
電話 046-801-7881

